令和5年2月1日発行　春燈／第78巻第2号（毎月1回1日発行）　昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2023 February

2月号

久保田万太郎の句

詠みし句のそれぞれ蝶と化しにけり

『春燈抄』昭和二十二年

蝶が主役で、他は抽象的ですらある。なのに一読鮮明、真っすぐに伝わってくる。なんと美しい句、哀しいまでにうつくしい。はなたれた蝶たちは、目には見えないが誰かの心をノックしているかも知れない、海の向こうを恋うて海峡を渡ってゆく蝶の群れ、高みに憧れ空の彼方へ消えてゆくものー。そして私の脳裡にも数えきれない蝶の化身たちが群れとんでいる。

沼田桂子

PDF= 俳誌の salon

久保田万太郎の句

柳散り蕎麦屋の代のかはりけり

『久保田万太郎句集』昭和十七年

東京人にとって、蕎麦は常に身近にあるものだった。冬の季語で「晦日蕎麦」を良く目にするが、昭和初期頃までの商家では、月末になると晦日蕎麦を食べて、一ヶ月を締めていた。袋物製造業の家に育った万太郎もそうであったのだろう。贔屓の店もあったに違いない。しかしその店も代が代わってしまった。柳の散る秋、変わりゆく東京の街を見据えている万太郎の姿が見えてくる。

松山三千江

PDF= 俳誌の salon

名誉主宰　安立公彦

顧みる十二月八日の史実かな

夕映の空美しや年の市

雑踏の人の背に就く年の市

降誕祭冬至南瓜の残り香善し

在籍の証うするる師走かな

主宰　鈴木直充

ひややかにわが手を拒む陶土かな（陶句郎窯）

成形を終へたる碗や笹子鳴く

轆轤より切離す碗神の留守

焼く前の陶器の重り雪もよひ

陶房を出ると大綿待ちゐたり

PDF= 俳誌の salon

当月集

鈴木直充選

○　川端正紀

鳥渡る瀬戸の島々従へて
秋うらら木喰仏の無垢の笑み
砥峰や芒の海に沈没す
天命を使ひ尽くして朴落葉
蕎麦喰へばしぐるるばかり但馬路や

○　河田水尾

二ヶ間にてなべてこと足る冬籠
もう誰もゐない校庭夕笹子
書の砦にこもりて小さき咳こぼす
木枯やバス待つ列の最後尾
ナフタリンの微かな匂毛糸玉

○　福田水明

歯つ欠けのVサインかな七五三
寺宝展の魚板こんこん小六月
衰へぬ爺の眼力冬の鵙
冬晴や水琴窟に耳澄ませ
身の内の鬼を鎮むる葛湯かな

○　坂本依誌子

冒険家の妻なほ気丈石蕗明り
小魚のみりん干美味小六月
明日抜く歯を喜ばす大根漬
米寿夫婦と日々の話や葛湯吹く
いほり古り神田川沿ひ落葉霏霏

○　中島美冬

小六月屋号で呼び合ふ故郷かな
指切りの約束反古に神無月
三行の恩師の訃報冬近し
濡羽色の髪したる子や七五三祝
子の問ふやサンタはうちに来るかしら

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

鈴木直充選

口論の果ての言訳隙間風　宮崎　齊藤　豊

冬ぬくし近く遠くに岬馬

湯豆腐や坂を登ればわが家の灯

寒鯉の水面揺らさぬ泳ぎかな

秋冷やあ・うんのシーサー泰然と

時雨忌やまたも誤字にて文届く

気がつけば暮の早さよ落葉掃く

今日はしも冬賜のこゑ高からむ（悼）　兵庫　味園　建介

のぼさんか障子の内のしはぶきは

湯豆腐を好む齢となりにけり

入院の日取も決まり十二月

大阪に今も住ひて木の葉髪　大阪　森田まさる

霜ふるや鶏鳴たかき村の朝

階の手すり冷たし女坂　東京　高品ケイ子

宿の下駄濡らして帰る今朝の霜

意にそまぬ案件抱へ日向ぼこ

裏腹の言葉返しぬ唐辛子

難問のパズルに嵌まるちちろ虫

聊かの悔い疼きけりとろろ汁

寄生木に相似し吾や冬霞

赤のまま己の色を通しけり

サスペンス佳境に入るやそぞろ寒

星流れ宇宙の闇の果て知らず

木守柿来世信ずるよすがとや

押切れば白菜ぐぐと鳴く厨

うとうとと此の世離るる日向ぼこ

校庭を枯葉と走る陸上部

冠雪の浅間を退かぬ雲ひとつ

東京　吉原世都子

栃木　飯村　皎子

茨城　加藤　申女

PDF= 俳誌の salon